

令和6年度
第2回 ふるさと常陸太田の歴史散歩

令和6年10月27日（日）

～ 町屋の里めぐり ～



大正時代の町屋発電所

常陸太田まちかど案内人の会

第2回 ふるさと常陸太田の歴史散歩

～ 町屋の里めぐり ～

目 次

1. 河内地区の概観	・・・・・・・・・・・・・・・・	1、2
2. 金砂山道標碑	・・・・・・・・・・・・・・・・	3
3. 石川水軒碑	・・・・・・・・・・・・・・・・	3
4. 智教院	・・・・・・・・・・・・・・・・	4
5. 旧町屋変電所	・・・・・・・・・・・・・・・・	5
6. 町屋発電所跡	・・・・・・・・・・・・・・・・	6
7. 水戸國府記碑	・・・・・・・・・・・・・・・・	7
8. 町屋橋	・・・・・・・・・・・・・・・・	8
9. 寿蔵碑	・・・・・・・・・・・・・・・・	8
10. 平山君遺徳碑	・・・・・・・・・・・・・・・・	9
11. 吉田君父子頌徳の碑	・・・・・・・・・・・・・・・・	10
12. 吉田神社	・・・・・・・・・・・・・・・・	10
13. 龍城根本翁彰功碑	・・・・・・・・・・・・・・・・	11

1. 河内地区の概観

(1) 地域の産業

常陸太田市の中央部(旧常陸太田市北部)に位置する河内地区は、里川が形成した谷沿いに、南北に走る棚倉街道の宿場町として栄えた。町屋町の中心には、昭和 30 年市制施行以前の旧河内村時代に村役場が設置され、行政の中心地でもあった。

農林業が主で、昭和の中期までは養蚕や葉煙草耕作、木炭の生産が盛んに行われ、農家の現金収入の源となっていた。

工業では、明治初期の頃から町屋富士山等で斑石の採掘が行われ、斑石販売会社が設立されていた。特に、斑石は瑞龍山水戸徳川家墓所にも使われており、二代藩主光圀以降の墓石として知られている。

商業は町屋宿通りに、最盛期には最大 9 件の旅館が営業し、多くの飲食、娯楽施設が軒を連ね、大変に賑やかだった。以前には従業員 200 名を超す食品製造工場も操業していた。



昭和 40 年、町屋町の家並み



昭和 20 年、学童疎開先の町屋福知屋

写真『写真記録茨城 20 世紀』

(2) 交通と人口

昭和の初期までの棚倉街道は、常福地から春友、鎌倉、太郎坂と山沿いを通り、里川を渡り、台、古宿と川沿いに町屋宿へと入った。昭和 2 年に鉄筋コンクリート造りの町屋橋が竣工、昭和 12 年にアーチ型の登録有形文化財央橋(なかばし)が完成し、新道として主要道となった。

往時の棚倉街道として利用されたこの道は、昭和 9 年の水郡線全通によって大量輸送の時代を迎え、主要道としての地位が低下し始めた。

更に、昭和 19 年の町屋町中心地の大火により多くの商店が焼失した。すぐに復興を果たしたが、近年は経済環境の変化やバイパスの完成から、宿通りの交通量は激減した。然し、宿通りを流れる江川は、防火や生活用水として長く利用され、町屋宿の家並みと調和し、今でも旧宿場町の面影を強く残している。

人口は明治中期には、300 余世帯 2,100 余人が生活していたが少子高齢化に伴い、令和 6 年 9 月 1 日現在では河内地区 404 世帯 874 人となっている。町屋町は 253 世帯 570 人。

市市民共同推進課資料より、参考であるが西河内下町 112 名、中町 133 名、上町 59 名となっている。

(3)文化について

祖先がこの地に入り、山野を切り開き、多くの困難に打ち克ちながら山紫水明の地を作り上げた。

古くから交通の要所であった事で情報がいち早く伝えられた為か、教育の重要性を感じ取り、多くの文人により私塾が形成され子弟教育が盛んに行われ、要職を兼務しながら郷土愛を育み、地域発展の為に尽された。

(往時は町屋宿通りに棚倉街道では太田に次ぐ札所があった。)

西河内地区は、山間の農林業を中心に生活してきた地で、金砂山に参詣する道路としても利用され(金砂山道標碑)、寺社跡の多い事でも信仰厚い事が判る。結束力に優れ教育文化の香り高い処である。

その礎は、後述の先人を紹介する文献や地域内点在する多くの史跡からも垣間見る事が出来る。

『河内のふるさとを探る』



黒磯バッケよりの町屋宿眺望

2. 金砂山道標碑

町屋の宿はずれ、小里街道（棚倉街道）から西河内への入口の丁字路、ガードレールの外に金砂山道の碑が立っている。

町屋特産の斑石で、高さ 80cm 幅 50cm ばかり、自然石の荒れた表面に文字が刻まれている。正面上部に梵字を一字刻み、「金砂山道」と記し、その下部を二行に分けて、右側は「西河内」、左側は「染けかの」と読める。

下部の「西河内、染けかの」の地名は、左右2行に彫られているが、ふた又道での左、右の道をさすものではなく、ともに「これより西河内・染・けかの」であることを小里街道に入る参詣者に示したもので、この道はさらに天下野へも続く道であることを教えている。年紀を欠くのでいつ頃建てられたものか明らかではない。「染」は三染に分かれる以前の「染村」を指すように考えられるが、「けかの」の名が見えるので、元禄（1688～）以後の建碑と思われる。

もとは現在の位置より少し南の、西河内旧道の入口に立っていて、長い間大勢の参詣者に金砂山への道を教えていたが、いつしか西河内新道の下の里川べりに置かれていたのを昭和 51 年に現在の位置に移された。

『常陸太田の金石文集』



3. 石川水軒碑 すいけん（水軒翁碑）

前文部大臣・衆議院議長 正四位 勲三等 大岡 育造 題額
衆議院議員 勲三等 根本 正 撰並に書

石川水軒翁碑には、石川又衛門義政（水軒先生）の伝が書いてある。

文政3年8月28日、茨城県久慈郡河内村西河内下町に生まれ、幼少の頃より、才知があり、水戸藩加倉井淡路に弟子入りし、経書を学んだ。

その後、藤田北郭（ほっかく）の門に入りて史籍を修めた。

教育者として、福島県楨野村に招かれ学舎を数年開いたが、その後郷里に戻り家塾を開いた。

その塾には常に百人からの弟子が出入りしたと言われる。一面、先生は、郷里の要職も兼ね、公事に尽くす事も大きかったと言われている。

明治38年11月22日（86歳）で亡くなる。



『河内のふるさとを探る』

4. 智教院 住所 西河内下町1206

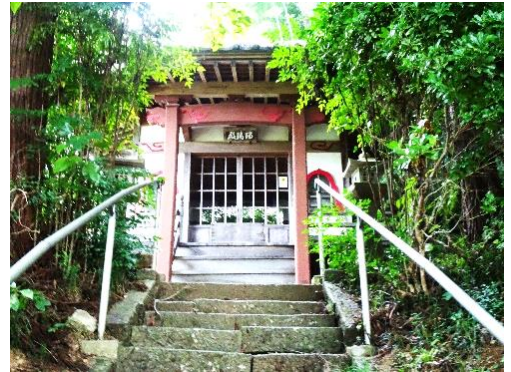
山号は真言宗豊山派高麗山薬泉寺智教院で、現在の住職は粕谷善通氏が務めている。

建立時期については二説あり、『常陸國誌』では文明元年（1469）、佐竹氏が太田城であった時に宥幸上人によって建立。門徒寺は西河内中村、金乗院・宝蔵院と記されている。



一方、『久慈郡郷土史』には、京都御室御所大本山仁和寺の末寺にして、高麗山薬師寺と称し、鳥羽天皇の第5子である本仁の宮〔大治4年（1129）降誕〕が、嘉応3年（1171）大覚和尚に銘じて開山したが、その後、荒廃したと記されている。

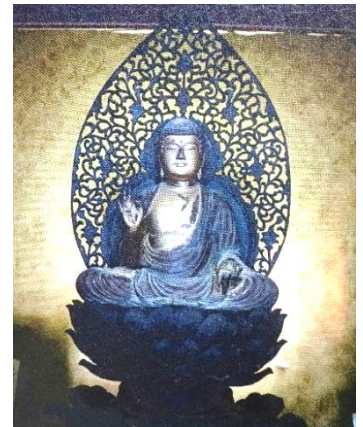
『河内のふるさとを探る』



智教院の本寺は水戸宝鏡院で、太田城主の佐竹氏12代当主義人（1400～1468年）により、祈願所として建てられたもので、元々は現在の常陸太田市栄町にあった。

文禄年間（1593～1596年）に19代当主佐竹義宣（1570～1633年）が水戸に移転して、水戸藩主の祈願所となったが、智教院は宝鏡院の末寺で最古の創建部類に入るといわれている。

現在の本堂は、明治12年（1879）6月に再建されたものである。（一説には、現在の日立市下深荻町にあった金剛山清竜寺西照院の本堂を移築したという。）



阿弥陀如来座像

本尊は阿弥陀如来座像で、脇侍として観世音菩薩立像が現存している。本堂の左手の小さい場所に薬師堂があり、薬師如来座像が祀られている。

薬師堂は、鎌倉時代に伊豆国から移されたとの記録があるが、現存のものは昭和60年（1985）に再建された。

「智教院住職粕谷善通氏講演資料」

5. 旧町屋変電所

(国登録文化財 平成 11 年 8 月 23 日登録)

旧町屋変電所は、明治 42 年（1909）1 月、JX 金属株式会社の前身である久原鉱業所日立鉱山によって建設された町屋発電所の変電施設である。

明治 38 年 10 月 31 日、後に「茨城の電気王」と呼ばれた前島平を中心として設立された茨城電気株式会社



が、中里発電所の建設に着手した。しかし、工事は思うように進まなかったことから、日立鉱山が買収し、明治 40 年 3 月に中里発電所からの送電が開始され、明治 42 年 1 月には町屋村に 300kw の町屋発電所を新設した。

前島平は中里発電所を譲渡すると、水戸に火力発電所を建設し明治 40 年 8 月 10 日に県内で初めて水戸に電灯がともった。その後、明治 44 年の春に茨城電気株式会社が中里発電所とともに町屋発電所を買い取り、家庭への電力供給に着手した。同年 11 月、旧太田町、旧誉田村、町屋に初めて電灯が灯り、町屋の人々は「電気見たけりゃ町屋へ行け」と偉大な町のシンボルを誇ったという。

煉瓦造りで切妻屋根の建物と寄棟屋根の建物がつながった外観が特徴のこの変電施設は、町屋発電所から送られてきた電力をフランス製と見られる碍子(がいし)を使用して各地に送電していたとみられる。

昭和 31 年（1956）まで変電所として機能した後は、地域の集会所として利用されていたが、平成 4 年に新しい公民館の完成を機に、集会所の役目を終えた。

平成 11 年 9 月 7 日付で国登録有形文化財となり、現在は「河内の文化遺産を守る会」によって建物の活用と周辺整備が進められている。

東日本大震災では、レンガの壁に亀裂が入るなどの大きな被害を受けたが、平成 25 年 2 月に耐震補強も含めた災害復旧工事が終了した。

「常陸太田市ホームページ」より

<前島 平（まえじま たいら）>

慶応元年（1865）上大野村（現水戸市）の水戸藩士井坂幹の二男として生れ、太田村の亀宗呉服店に丁稚奉公し、認められ「亀宗」本家「亀半」の前島家に婿養子となる。後に太田実業倶楽部会長、町会議員等を務め、明治 31 年（1898）太田郵便局長に任命された。

その後、父祖伝来の家業「亀半」を閉じ、明治 39 年（1906）茨城電気株式会社を立ち上げ、茨城県の電気事業を立ち上げた。

6. 町屋発電所跡



町屋発電所は、明治42年（1909）、日立鉱山への電力確保のために建設された。

上の写真の上方にある水門から鉄管を通して水が流れ込み、下方にある水車を回して発電を行っていた、いわゆる水力発電所である。

建設当時の記録では

水 量：毎秒 120 個（30 羽／個）、有効落差 38 尺（約 12m）

水 車：米国モルガンスミス社製、マツコーミック双放水 560 馬力

発電機：米国ウエスチングハウス社製 3 相 3,500V 60 ヘルツ 300kw
とある。

建設当時 300kw あった最大出力は、発電機の老朽化により昭和 31 年（1956）4 月 1 日に東京電力により廃止された時は、最大出力 140kw であった。

昭和 31 年に役目を終え、その跡地に建物や機械は無いが、上水槽の遺構が一部あり、水路は発電所の廃止後も農業用水路として一部残っている。

平成 11 年（1999）9 月に町屋発電所跡の地形などが、旧町屋変電所建物と共に国登録有形文化財となり、地域の人たちの手で大切に保存されている。

「常陸太田探検隊講座資料」

7. 水戸國府記碑

正二位 勲二等 徳川 昭武 題額

従五位 勲四等 高橋 諸髓 撰、 根本 龍城 書

この碑は、明治41年（1908）10月に久慈郡内の有志が和田治兵衛の功績を顕彰し、和田氏遺宅の前に建てたものである。

江戸中期、水戸藩における煙草の生産は農業作物として大きな位置を示しており、当時の太田町は近郊農村の煙草の集散地となっていた。

文化7年（1810）になると町屋の和田治兵衛によって収穫葉の乾燥方法が研究され幹干法が発明された。この方法は従来の生葉だけを縄に吊るして日光で乾燥していた連乾しに代わって、葉の付いたまま幹ごと刈り取って屋内に吊るし、日光によらず風力によって乾燥させる方法であった。天候にも関係なく安心して乾燥ができ、しかも香気色つやも連乾しより勝っており太田町の商人にも好評を博していた。これを7代藩主治紀公（武公）に献上して成果が認められ、また薩摩煙草の「車」「伊勢屋敷」「竜王」「砂走」の4種を導入して栽培を始め研究を重ねた。

文化10年（1813）再び武公に献上したことが契機となって、以後太田地方に国分葉の耕作が普及しはじめ幹乾法も大に行われ、収穫量も増え価格も高かったので急速に広まっていった。やがてこれは「水戸国府」として名声を博するようになった。

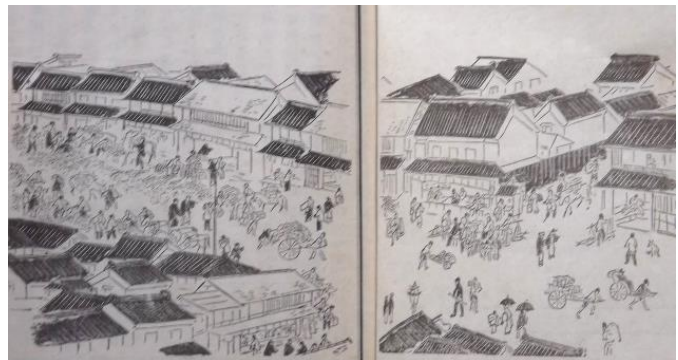
『常陸太田の金石文集』



＜常陸太田市の煙草の歴史＞

久慈地方に煙草が盛んに栽培されるようになったのは、赤土村の金田次兵衛が慶長13年（1608）から寛永初年頃にかけて栽培したのが始まりとされる。

煙草は藩の奨励もあって、水田の少ない久慈郡北部地方に盛んに栽培されるようになった。



文化年間（1804～）の頃には久慈郡金砂、天下野、山田、小里、町屋の諸郷一円に広がり、同地方の特有物産になった。市の立つ日には、各地から葉煙草を載せた馬や、馬車等で道は混雑し、さらに買い出しの人たちで商店の店先や飲食店など大いに賑わった。このように煙草の栽培は、県北部の商業都市・太田町の発展に大きく貢献してきた。

『太田勝景誌』「太田市内煙草市群集」

8. 町屋橋

町屋橋は、昭和2年（1927）竣工した鉄筋コンクリート造りの全長44.4mの橋である。

春友から旧349号に入り町屋宿通りになる手前に位置し、橋脚は二重のラーメン式の構造であり、橋の両端の親柱は石灯籠をモチーフとし、電灯を灯した跡がみられる。

地元では、橋の袂にあった旅館「国華」にちなみ、「国華橋」とも呼ばれている。



＜ラーメン式構造＞

主桁と橋脚や橋台を剛結する橋梁である。主桁に対しても耐震設計が必要であるが耐震性に優れ、建設費が安いなどの特徴がある。

『河内のふるさとを探る』

9. 寿蔵碑^{じゅそう}

正五位 勲四等 力石 雄一郎 篆額
山田 重光 撰、根本 龍城 書

この碑は、町屋の村長であった和田利八郎の事績を称えたものであり、大正7年（1918）3月上浣に建立された。

和田氏は弘化2年（1845）10月生まれ、剛直にして節義を重んじ、村会議員、人民総代、収入役等を歴任して村長に推されたが、その職を翁胞兄東八郎に託した。

また、土木事業や警察等に費を献ずること前後数次にわたり、しばしば褒章を受けた。

質実剛健な人生を送り、終始人のために尽くされたことが記されている。

『河内のふるさとを探る』



10. ^{ひらやまくん}平山君遺徳碑

正二位 勲一等 侯爵 西園寺 公望 篆額
正二位 勲一等 伯爵 板垣 退助 撰文
男 亮 謹書

この碑は、平山東里の事績を板垣退助が文を書いて、東里の息子（亮）が記したものであり、明治43年（1910）12月に建立された。

天保6年（1835）12月常陸国久慈郡町屋村に生まれ、本名は寛、字は淑栗、号は東里と呼ばれていた。

東里は、質実剛毅で17歳で藤田幽谷の青藍舎に入り藤田東湖らと経史を学び、また、弘道館では、剣法を千葉、渡辺諸氏に修行する。嶄然として頭角を現し、藤田東湖の深い信頼を得る。明治元年（1868）北越追討軍に参加し、同2年には函館追討の命を受けた。

明治6年（1873）町屋村戸長に、同22年（1889）市制・町村制実施に当たり河内村長となり、20余年間村政に意を注ぎ、農業の改良、殖産興業を奨励し、公共事業に尽力した。

明治20年（1887）代に入ると、自由党に入り、彼は同志と計り、自由民権運動の指導者板垣退助を太田に招待して談話会を開いたりして、自由党の勢力拡大にも活躍した。

晩年、私塾晩翠義塾を町屋に創立し、子弟の教育にあたった。詩文にも長じ、また東湖流の能書家として特に有名である。



『河内のふるさとを探る』

11. 吉田君父子^{よしだくんふし}頌徳の碑

従四位 勲四等侯爵 徳川 圀順 額
水戸 栗田 勉 撰
北条 時雨 書

この碑は吉田神社の神官であった吉田明允（あきのぶ）、明正父子の業績を称えて対象7年に建立されたものである。

明允は、文政2年（1819）生まれ、天保8年（1838）神官となり、明治15年（1882）8月64歳で病没した。

小壮時豊田天功に経過史を、また渡辺政直に剣法を学んだ。弘化元年（1844）斉昭が大老井伊直弼により駒込に幽囚されると死を持って自ら誓って江戸に上り、参政大岡侯に上訴し獄に繋がれた。

その後も東西に奔走して搜索急にして各地に潜伏した。安政2年謁見を許された。

明允の子明正は、豊田天功に経史を、渡辺政直に剣法を学んだ。文久3年（1863）には将軍家茂の入朝に際し順公（十代慶篤）の籠に従って上京した。天狗党の乱によって元治元年（1864）8月には穴戸藩主松平頼徳に従って水戸城に入ろうとして市川勢に阻まれ那珂湊に転戦した。

その後帰郷して教職前後40年、河内村小学校の校長となった。

『河内のふるさとを探る』



12. 吉田神社

常陸太田市町屋町 1323

『新編常陸國誌』には、「社殿八高八尺、表七尺、妻六尺神体八鏡（八幡ヲ潰シテ吉田ニ改ム）、前殿八長三間、横二間、鳥居八高七尺、横同上、社領八二石八斗三升ナリ」とある。

また『久慈郡郷土史』には「村社吉田神社町屋にあり、日本武尊を祀る。住吉は八幡にして後冷泉天皇康平年中（平安時代 1058～1065）八幡太郎義家朝臣の鎌倉より遷宮す。元禄9年（1696）11月、源義公（よしきみ）の命により八幡を水戸に遷宮す。則ち現今の水戸市八幡町県社八幡宮是なり、更に吉田神社に改む。社高三石云々」とある。

これにより吉田神社は日本武尊を祀り本体は鏡である。また、吉田神社は住吉八幡宮と呼ばれていたものが江戸時代に吉田神社と改められた。

『河内のふるさとを探る』



13. 龍城根本翁彰功碑

菊池 謙二郎 題額並に撰文
杉山 健之介 書

この碑は、昭和7年（1932）5月に建立され、碑文には、「常陸国久慈郡町屋一帯の地石材を包蔵す其の質堅緻其の色潤沢斑紋亦雅致あり古来斑石の名を以て知らる。然れども之を採掘して世の利用に供せしものなし、ここに人あり氏は根本、名は健介、号は龍城という。」とある。

龍城はこの斑石に着眼し、明治5年（1872）3月に、河内村町屋字藤山蝮沢、鳥居前、遠藤沢、東河内字八株沢、西河内下入文字部及び佐都村春友字桶場等全ての36ヶ所の杭区採掘権を得て、開抗に着手し販売の途を開いた。

明治8年（1875）10月には、業務拡張を図るために、平山寛等数名の有志と常陸斑石会社を創立し、販路拡大に成功した。

また翁は、習字にも優れ、町屋町には、数多くの碑があり「水戸國府碑」「寿蔵碑」などは、翁の筆によるものである。



<斑石（町屋石）>

斑石にはその模様によって笹、亀甲、牡丹、紅葉、霜降り等の種類があり、特に笹目石が高級とされ一般には使用出来なかった。加工しやすく風化しにくいことから、石碑や記念碑に使用されている。

『河内のふるさとを探る』